

廃棄物処理対策研究事業 中間評価 評価結果

研究課題名	代表研究者	総合評価	学術的 必要性	社会的 必要性	目標の 達成度	計画の 妥当性	継続 能力	補助の 必要性
実団地における資源循環型ライフスタイル普及のための環境コミュニケーションとその効果に関する実証的研究	広島大学 早瀬 光司	39.7	40.8	42.5	42.0	47.7	45.0	43.3

(研究概要) 研究概要及びこれまでに得られた研究成果を400字以内で記入

本研究は、生活者に資源循環型ライフスタイルを普及・浸透させるための環境コミュニケーション手法を開発することを目的とする。3年間に渡る継続的な社会実験を実施し、提案するコミュニケーション手法の効果を分析すると共に、具体的な展開方法について検討する。初年度である16年度は、環境コミュニケーションの構成要素を導出するために、生活者の環境配慮行動の実態とその促進/阻害要因の解明を試みた。具体的には、「環境配慮行動規定要因モデル」を構築し、その因果性の解明と異なる行動間の相違等を検討した。生活者に実施した調査データに適用した結果、提示モデルは6つの環境配慮行動いずれにおいても統計的な妥当性が確認された。また、行動間でその因果性が異なるものの、「やりがい感」と「健康・安全性」が共通の促進要因になっていることが明示された。これらの成果に基づいて、次年度に実施する環境コミュニケーションの設計を行った。

(評価コメント)

- 代表性のあるサンプルの定量化に努めて欲しい。
- リサイクルに係る現場ベース(ミクロ)の調査であるが、有益である。
- 名古屋市や横浜市ではごみ排出量が3割と大幅に削減されている。そのような自治体で住民の行動がどうなったのかを解析する方がより直接的に有用な知見が得られると考えられる。
- テーマである「環境コミュニケーション」の定義が抽象的。結論も目的とは少しずれている。
- 資源循環型ライフスタイルが単純すぎないか。
- 研究意図をより明確にすべき。

注1) 総合評価等の数値は偏差値である。

注2) 評価コメントについては、研究課題代表者が、総合評価を評価者全体の評価結果として捉えた上で、すべての評価コメントの反映を目指すのではなく、各コメントの中で今後活かすべき重要な指摘や示唆が何かを吟味・判断の上、今後の研究計画の見直し等に活用することを期待する。